

# アポイ岳ジオパーク

2008(平成20)年認定

●アポイ岳は、世界ジオパークネットワーク(GGN)が統括する日本ジオパークネットワーク(JGN)の一員として認められています。ジオパークは、ユネスコが支援するヨーロッパ発祥の活動で、貴重で美しい地質や地形を含めた自然遺産を、教育や観光に活用して地域社会の活性化を図ることを目的としています。

## シカを授けたアペオイヌプリ(アポイ岳)

昔むかし、この地方には鹿がいませんでした。鹿はアイヌ民族にとって大切な食料です。アイヌの人たちは衆議をこらした結果、天神に鹿が授かるように祈願することになりました。祭場を今のアポイ岳山頂に選び、祭壇を設け股木を建て、各自秘蔵の宝刀をかけ並べました。そして燃え草を山と積み上げ、天を焦がすばかりに火を燃やして大きな火の玉を作り、木幣を奉り、酒を献じてカムイノミ(神に祈る)をして、真剣に願を立てました。

その効験あらわれて、それからはこの地方に鹿が繁殖してアイヌの人たちの生活を豊かにしてくれました。それでこの山の名を(アペ…火、オイ…多くあるところ、ヌプリ…山)と呼ぶことになりました。アペオイヌプリ。「大火を燃やした山」の意味で、アポイはその詰まった言葉です。



## アポイの花たちを守るために ～登山者の方へ～

- アポイ岳高山植物群落は、私たちが子孫に永久に守り伝えていくべき国民全体の財産です。特別天然記念物は、自然界の国宝といえます。
- 盗掘は許しがたい犯罪行為です。天然記念物指定区域内では文化財保護法、自然公園法、森林法、道条例のすべてに違反し処罰されます。盗掘を見かけた方は勇気を持って警察等へ通報してください。
- 植物群落に最もダメージを与えているのは一般の多くの登山者(写真撮影者)の不注意による「踏み付け」です。登山道を一步でも外れないよう一人ひとりが十分気を配って登山してください。
- 貴重な高山植物を守るため登山口の小川で靴底の泥を洗い流し外来植物の侵入を防ぎましょう。



ヒダカソウ

【発行】

### 様似町役場商工観光課

〒058-8501 北海道様似郡様似町大通1丁目21番地  
TEL 0146-36-2120 FAX 0146-36-2662  
E-mail apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp  
URL <http://www.apoi-geopark.jp/>

# アポイ岳

Mt. APOI

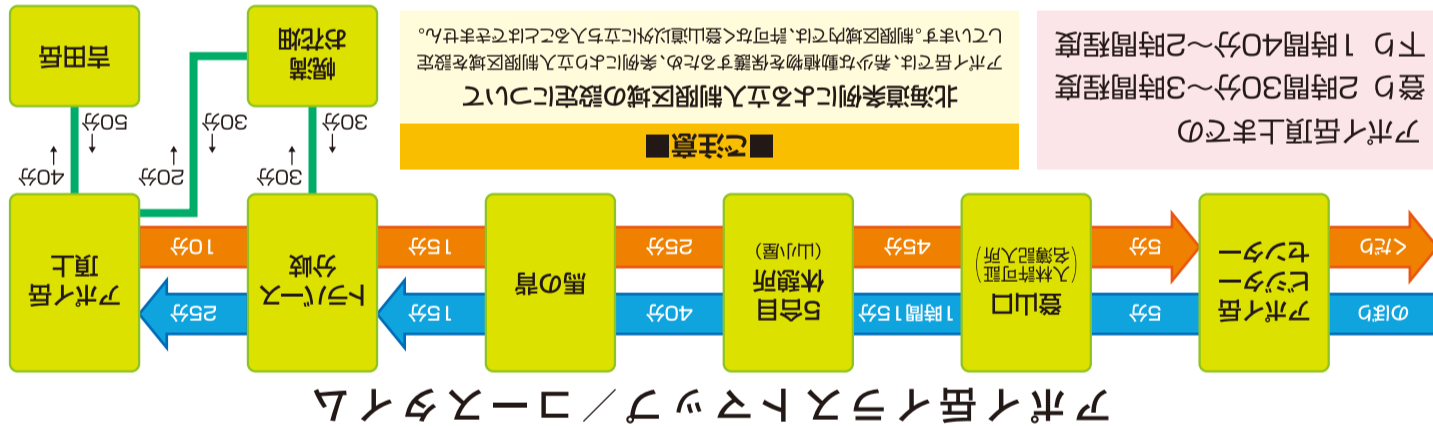


かんらん岩の偏光顕微鏡写真

## アポイ岳ジオパーク

MT. APOI GEOPARK

この立体地形図は「カシミール3D」を使用して作成しました。なお、登山道・道路などは概要を示したもので、位置は多少の誤差があります。



- 長年続いた盗掘と、温暖化と思われる植生の変化により、アポイの高山植物群落は特別天然記念物に指定された半世紀前に比べ、5分の1以下にまで縮小したといわれています。アポイ岳ジオパークや研究者、行政で構成する「カムイノミ1952アポイ再生委員会」は、昔のお花畑を取り戻そうと、中腹での再生実験調査に取り組んでいます。
- 国内ではアポイ岳にのみ生息する高山蝶「メチャクチャセリ」のほか、周辺にはクマゲラやエゾマシロウが生息し、いずれも天然記念物に指定されています。さらにアポイ山塊でのみ生息が確認されている固有の陸貝「アポイマシロ」や、氷河期遺存種であるナキウサギの生息が特筆されます。
- かんらん岩という超塩基性の特殊な土壌条件、また海に近く、海霧や強風の影響を大きく受け、しかも冬季の少雪という気象条件により、低標高ながら稜線部に高山植生が成立し、ヒダカソウやエゾクマゲラ、アポイカンパツといった固有種をはじめ、数多くの固有植物の生育を可能としています。
- アポイ岳(810.2m)は、日高山脈の南端付近の西海岸寄り(北緯41°)に位置する山で、北麓沿いのピンスリ(958.2m)及び南東の幌満岳(685.4m)を含む山塊は、約1300万年前の日高山脈の形成に伴い、地下数10kmの上部マントルが上昇露出したとされる「幌満かんらん岩体」により構成されています。

1952(昭和27)年指定

## アポイ岳高山植物群落

国指定特別天然記念物

# アポイ岳の固有植物

固有種	アポイアザミ エゾコウゾリナ アポイカンバ サマニオトギリ ヒダカソウ	<i>Cirsium apoiense</i> <i>Hypochoeris crepidioides</i> <i>Betula apoienis</i> <i>Hyericum samaniense</i> <i>Callianthemum miyabeianum</i>
準固有種	エゾイヌノヒゲ ヒダカイワザクラ ミヤマハンモドキ サマニカラマツ エゾタカネニガナ アポイタヌキラン ヒダカトウヒレン	<i>Eriocaulon perplexum</i> <i>Primula hidakana</i> <i>Rhamnus isidiae</i> <i>Thalictrum integrilobum</i> <i>Crepis gymnopis</i> <i>Carex apoienis</i> <i>Saussurea riederi</i> ssp. <i>kudoana</i>
固有亜種	ホソバトウキ	<i>Angelica acutiloba</i> ssp. <i>lineariloba</i>
準固有亜種	アポイアズマギク サマニユキワリ ヒメシラネニンジン アポイヤマブキショウマ アポイツメクサ アポイマンテマ アポイキンバイ アポイカラマツ	<i>Erigeron thunbergii</i> var. <i>angustifolius</i> <i>Primula modesta</i> var. <i>samanimontana</i> <i>Tilingia ajanensis</i> var. <i>angustissima</i> <i>Aruncus dioicus</i> var. <i>subrotundus</i> <i>Arenaria katoana</i> var. <i>lanceolata</i> <i>Silene repens</i> var. <i>apoiensis</i> <i>Potentilla matsumurae</i> var. <i>apoiensis</i> <i>Thalictrum folitidum</i> var. <i>apoiense</i>
準固有変種	チャボヤマハギ ヒダカトリカブト ヒメエゾネギ エゾサイコ エゾクスミレ ピロウドエゾシオガマ アポイゼキショウ	<i>Lespedeza bicolor</i> var. <i>nana</i> <i>Aconitum yuparense</i> var. <i>apoiense</i> <i>Allium schoenoprasum</i> var. <i>yezomonticola</i> <i>Bupleurum nipponicum</i> var. <i>yezoense</i> <i>Viola brevistipulata</i> var. <i>hidakana</i> <i>Pedicularis yezoensis</i> var. <i>pubescens</i> <i>Tofieldia coccinea</i> var. <i>kondoii</i>
固有品種	アポイクワガタ アポイハハコ アポイミセバヤ	<i>Veronica schmidtiana</i> var. <i>yezoalpina</i> f. <i>exigua</i> <i>Anaphalis alpicola</i> f. <i>robusta</i> <i>Hylotelephium cauticum</i> f. <i>montanum</i>
準固有品種	エゾノハクサンボウフウ	<i>Peucedanum multivittatum</i> f. <i>linearilobum</i>

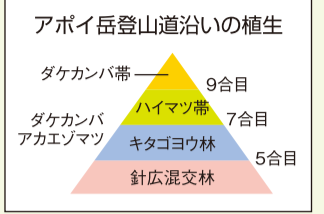
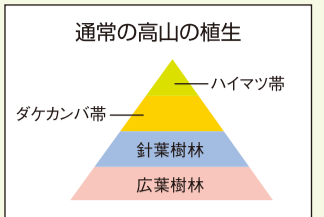
# アポイ岳植生の不思議

## 頂上にダケカンバの樹林、垂直分布の異常

通常、北海道の山の植生は標高が高くなるにつれ、下から広葉樹林帯→針葉樹林帯→ダケカンバ帯→ハイマツ帯と移り変わっていきますが、アポイ岳では9合目から頂上にかけての区間が、ハイマツ帯より上であるにも関わらずダケカンバ林に逆戻りしているのです。強風の影響が弱まっているなどの理由が考えられますが、その下草にいたってはスズランやエゾオオサクラソウなど山麓部の植物を伴っており、謎は深まるばかりです。



山頂直下のダケカンバ林

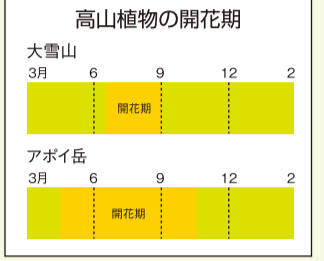


## 標高300mくらいからハイマツが

ハイマツ帯、すなわち高山植生帯は本州中部なら通常2,500m以上、北海道内でも1,000m以上にならないと現れません。ところがアポイ岳では、5合目(約350m)から高山植物が見られ、場所によっては300mくらいの標高でハイマツ群落が成立しているのです。気象的な条件もさることながら、かんらん岩という特殊な土壌条件が通常の植生の成立を困難にし、同じ標高でもより気候的に寒冷な状態と同じ効果をもたらすものと考えられています。

## 日本で一番早く、また一番長く高山植物の花が楽しめる?

一般に、高山植物の開花は雪解けの時期に左右されます。アポイ岳では、通常の高山植生を持つ山と比べて冬の積雪量が圧倒的に少なく、4月半ばにはおおむね雪が消えてしまうため、5月初旬からヒダカソウやサマニユキワリが開花し始めます。また低山であることから初雪の時期も遅く、10月のコハマギクに至るまで半年近くもの異例に長い花期を有しています。



<i>Callianthemum miyabeianum</i>	<i>Hypochoeris crepidioides</i>	<i>Betula apoienis</i>	<i>Primula modesta</i> var. <i>samanimontana</i>	<i>Erigeron thunbergii</i> var. <i>angustifolius</i>	<i>Viola sachalinensis</i> var. <i>alpina</i>	<i>Viola brevistipulata</i> var. <i>hidakana</i>
<i>Primula hidakana</i>	<i>Thalictrum folitidum</i> var. <i>apoiense</i>	<i>Arenaria katoana</i> var. <i>lanceolata</i>	<i>Veronica schmidtiana</i> var. <i>yezoalpina</i> f. <i>exigua</i>	<i>Tofieldia coccinea</i> var. <i>kondoii</i>	<i>Anaphalis alpicola</i> f. <i>robusta</i>	<i>Aruncus dioicus</i> var. <i>subrotundus</i>
<i>Allium schoenoprasum</i> var. <i>yezomonticola</i>	<i>Potentilla matsumurae</i> var. <i>apoiensis</i>	<i>Eritrichium nipponicum</i> var. <i>yezoense</i>	<i>Silene repens</i> var. <i>apoiensis</i>	<i>Lespedeza bicolor</i> var. <i>nana</i>	<i>Hyericum samaniense</i>	<i>Thalictrum integrilobum</i>

# ヒメチャマダラセセリ *Pyrgus malvae*

国指定天然記念物(昭和50年指定)

ヒメチャマダラセセリ(セセリチョウ科)は、開長約2.5cm、茶褐色に白い斑点のある小さなチョウで、ロシア・モンゴルなど北方に分布し、わが国ではアポイ岳の高山帯のみに生息する貴重なものです。1973年に北海道大学昆虫研究会の学生によって発見され、翌年同会の調査によってその生態が明らかになりました。幼虫は高山植物のキンロバイを主食とし、成虫は5月初旬～6月初旬の約一ヶ月間のみ見られます。アポイ岳のみに隔離分布しているのは氷河期に広く分布していたものが温暖になるにしたがい偶然ここに取り残されたからと考えられています。



# アポイマイマイ *Paraegista apoienis*

アポイ山塊とその周辺、幌満川沿いに生息する固有種(1970年に新種として記載)のカタツムリです。これは北海道に生息するヒメマイマイ属のタカヒデマイマイの近縁種で、かんらん岩が積み重なるすきまなどに生息しています。殻の大きさは成体で1cm程度、褐色で表面に硬く細い毛が生えているのが特徴です。

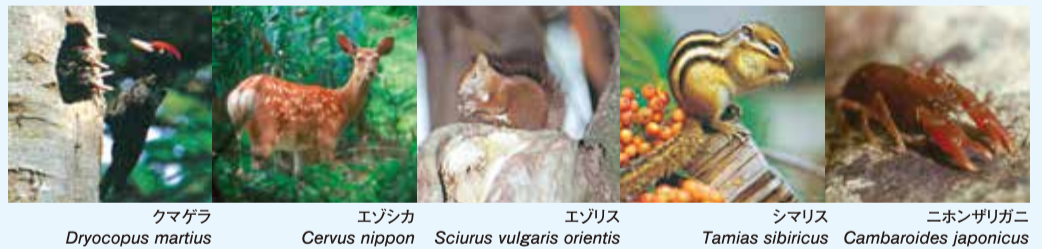


# ナキウサギ *Ochotona hyperborea*

氷河時代の遺存種(レリック…生き残り)として有名なウサギの一種で、体長約15cm、褐色、耳は丸く、「ピチッ」という鋭い警戒声を出します。北海道の中部および日高山脈の高山帯に生息していますが、日高南部のものは世界的にも分布南限に近いうえ、非常に低標高にまで分布し、アポイ山塊上部のみならず幌満川沿いのなんと標高50mでの生息も確かめられています。



# アポイ岳の他の動物



# かんらん(橄欖)岩

## マントルからのメッセージ

アポイ岳はかんらん岩という珍しい岩石で構成されています。地上で見られる岩石中で最も比重が高く(3.3g/cm<sup>3</sup>)、マグネシウムや鉄を多量に含み、二酸化ケイ素の比率の少ない「超苦鉄質(超塩基性)岩」に分類され、そこに生育する植物は特別な種類となる性質があります。かんらん岩の主要鉱物であるかんらん石の学名は、「オリビン(olivine)」です。これは色合いが植物のオリーブ(olive)に似ていることからきています。「かんらん(橄欖)」はこの和訳です。(ただし、橄欖はオリーブとは別のインドシナ原産の常緑樹です。オリーブが日本に伝わった際、利用法が似ている橄欖と混同ないし同一視されたため取り違えて命名されたといわれています。)かんらん岩の薄片を偏光顕微鏡で観察するとステンドグラスのように美しく(表紙参照)、さながら地上の高山植物群落の下に色とりどりの地底のお花畑が広がっているかのようです。かんらん石の大きな結晶は特に「ペリドット」と呼ばれ、宝石(8月の誕生石)として利用されます。



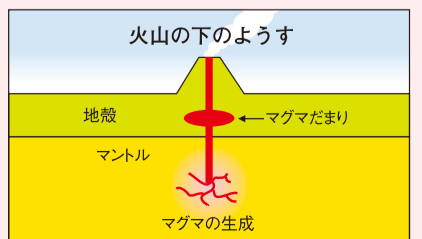
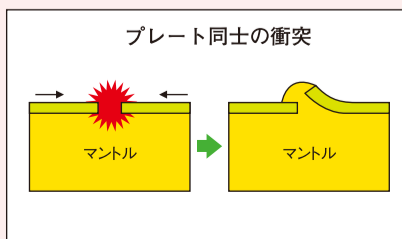
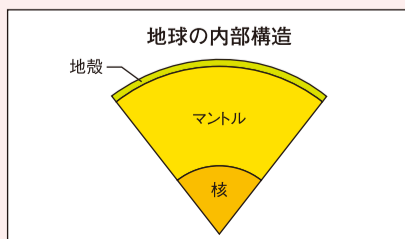
かんらん岩



ペリドット

## 地表に現れたマントル

地球の内部構造は、中心に核があり、表面に地殻と呼ばれる薄い皮のようなものがあって、それらの中間に地球全体の約8割を占めるマントルと呼ばれる物質があります。実はかんらん岩はこのマントルの上部を構成している岩石で、通常は地下数10kmもの深い場所にしか存在せず、本来地表にあるはずのない岩石といえます。それがなぜ露出しているのかというと、日高山脈の形成と深い関連があります。つまり、東側のプレートが西側のプレートにのし上がった際、その下にあったマントルの一部が突き上げられるように地表に出てきたと考えられています。



## マグマのふるさと【幌満かんらん岩体】

火山などから噴き出すマグマ(とけた岩石)は、上部マントル、すなわちかんらん岩の中からはみ出すように分離してできあがるのがわかっています。そしてアポイ岳を形づくる「幌満かんらん岩体」では、マグマ成分がまだたっぷり残っている部分から、マグマが抜けきった状態の部分、さらにその中間の状態を示す部分など、さまざまな種類のかんらん岩が分布しています。しかも、世界でも例がないほど新鮮な状態で地表に露出しているため、マントル内で起こっているできごとを地上でありのままに観察することのできる貴重な場所として地学分野で国際的に知られています。